法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

片岡良一「現代文学諸相の概観」 : 日本近代文学史叙述の研究(4)

大越, 嘉七

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
8
(開始ページ / Start Page)
45
(終了ページ / End Page)
50
(発行年 / Year)
1963-01-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019060

片岡良一『現代文学諸相の概観』

大越嘉七

一

「現代文学諸相の概観」（四一一頁・以下「諸相の概観」）は、「東京帝国大学国文学研究室」編集の雑誌『国語と国文学』昭和四年四月特別号「現代文学考察」の一つとして、湯地孝「現代文学序説」（一六六頁）とともに掲載された著者最初の近代文学（当時の現代文学）についての体系的叙述である。

この「諸相の概観」登場の意義――疎外されていた近代文学研究の市民権獲得に果した役割――については既に言われている。（本誌第二号「片岡良一教授追悼号」参照）。即ち、この雑誌の編集元である「東京帝国大学国文学研究室」とは、日本文学研究上のアカデミズムの中心であり、国学的観念と方法との支配ということもあって、近代文学の研究を自己の領域外に置くという傾向があった。またそういう国学的文学観念が支配的であった当時の「国文学者」達にとっては、近代文学（当時の現代文学）は扱い難い異物でもあったし、同時に再々括弧で言って来なければならなかったように、また「諸相の概観」が自然主義以後の「近代文学」を扱いながら「現代文学諸相の概観」と銘打たれていることにもあらわれているように、当時「近代文学」と「現代文学」との間には今日のようには別目のつけられないものであった。近代文学の本格的研究が、結局近代文学の誕生とともに、その担い手として生まれて来た文芸評論家や作家自身によって初められることになったのもそのためである。例えば、前号（第六号）本誌で取り上げられてきた相馬御風の『明治文学講話』（大正三）、高須梅溪の『近代文芸史論』、）大正一〇）、宮島新三郎の『明治文学十二講』（大正一四）などが、いずれも文芸評論家ないしは作家によって書かれたものであることにもそれは示されている。また岩城準太郎の『明治文学史』（明治三九）さえ、既に明らかにされているように、そういう文芸評論家や作家などの業績の上に成り立ったものであった。

だから「東京帝国大学国文学研究室」編集の『国語と国文学』が「現代文学考察」という六百頁もの特集号を出したところには、そ

ういうアカデミズムの伝統の中で、ようやく日本近代文学の研究というものが、回避することのできない重要な研究領域として認められるようになったことを示すものであった。（「諸相の概観」序文の冒頭には「『自然主義以後の現代文学に就て概観せよ、可及的多くの作家に触れて、』――そういう命令の下にこの稿の筆は執られた。」とある。）もちろん研究対象である近代文学そのものの性質からして、それを取り上げて研究する者自身には、それまでの所謂「国文学者」とは違うところの近代文学的感受性や文学観念や研究方法やが当然要求される。著者はまさにそういうものを十分にそなえた研究者として登場したのであった。だからこそ「諸相の概観」の登場が同時に前号（第六号）本誌にも一言触れておいたように、今まで考察してきた日本近代文学史叙述（本誌第四号・第六号参照）とはその本質において、即ち文学観念や研究方法において格段の相違を示すことになって、日本近代文学史叙述の新たな段階の成立を告げるものであり得たわけである。題名が示しているように、これは「文学史」とは銘打たれていないで「諸相の概観」という建前で書かれているので、そこには日本近代文学の独自な諸特質の分析と批判、近代日本の自我と文学的営為との関係（「第一章、個人主義文学の輪廓とその淵源」）などにもかなりの紙数（七〇頁）が割かれていて（それは本質的にもその画期的業績――方法――がそれを余儀なくした事情もあって）文学史としての体裁においては、後に同じ著者が岩波講座『日本文学』に書かれた「日本文学史概説・明治時代」（昭和六年一〇月・一六年五月増補されて中央公論社版『近代日本文学の展望』巻頭収録）などよりは不完全であるが、それを可能にした基礎がここに示されており、合せて後年の著者の研究を支えているものが歴然とうかがわれることからすれば、この「諸相の概観」は日本近代文学叙述史においてはもちろんのこと、著者の業績をみようとする場合にも見逃すことのできないものである。（註1）

また一方日本近代文学研究の歴史は、大和田建樹の『明治文学史』（明治二七）を嚆矢とすれば、当時（昭和四）既に三〇数年を経ている。その間さまざまな文学史的試みが、さまざまな人たちによってなされている（『講座日本近代文学史』昭和三二年大月書店刊、第五巻末、日本近代文学史関係文献目録参照）。特に大正も末年になると、木村毅・本間久雄・柳田泉・斉藤昌三など専門の日本近代文学研究者（既に触れてきたようにその研究の手始めは文芸評論家や作家によって始められた。）があらわれるようになって、日本近代文学史（特に明治期）の資料調査とその整理、それによる史的脈絡の跡づけなどが、意識的積極的に行なわれるようになって、日本近代文学史研究は、その基礎の確立をみるとともに、その後の研究を大きく刺激したのであった。漸次着実さを増してきた日本近代文学史の研究も、前号（第六号）本誌掲載の相馬御風や宮島新三郎の文学史の考察においても明瞭なように、当時は未だその日本近代文学の高嶺を形成する代表的作家たちとその諸作品について、その内部に立ち入って木目細かに鑑賞し批評する努力ということになると、今一歩の感があった。しかもその努力は、史観云々にかかわらず日本近代文学史叙述における不可欠の本質的条件であって、その前提なくしては、文字通り生きた「日本近代文学史」の成立もないわけで、それまでの実証的調査研究に加えて、そういう鑑賞や批評の上に立脚しての作家研究、流派研究、文芸思潮研究など、その専門

的本格的日本近代文学史研究、その具体的成果の先鞭は、まさにこの「諸相の概観」の登場を待たなければならなかったのである。

二

「諸相の概観」は、明治の新文学（自然主義文学）の誕生――その歴史的考察も含めれば二葉亭の登場から昭和初年の新感覚派文学に至るまで（執筆時――四年二月――発表作品まで扱っている）のその複雑を極めた四〇年間の歴史を――人間性と文学とのその複雑な発展を、あくまで個々の作品や作家の具体的吟味や分析を通して精緻に跡づけるとともに、更にその根本原因であるところの社会情勢の発展推移からも、その展開を科学的把握にまで高めようとする試みがなされている。そこに示されたもっとも大きな特色は、自然主義以後の日本近代文学の展開を「個人主義文学」の発達史として把握している点である。

即ち日本近代文学、外ならぬ自然主義文学の運動は、明治維新以来の烈しい時代的蕩揺「その時代的蕩揺の間に芽組み成長してきた個人主義的思潮への明瞭な把握。その把握に立脚して伝統的なものの一切を破壊せんとした運動。」であった。それは「過去を支配した封建道徳的な一切への反逆であり、同時に新しき個人主義的思潮のための行進曲」であった。「自然主義以後新感覚派に至る間の文学は、何れも自然主義のそうした態度の根本だけは、確実に継承してゐるのだ。」と。

この自然主義は個人主義的思潮（近代自我・市民意識）による運動であって、日本近代文学はこの自然主義によってその確立をみた。日本近代文学史は外ならぬ個人主義文学の発達史である、という一貫した把握。これは日本近代文学が文字通り「近代文学」たるところのその本質的モメントを鋭く摑んでみせたものであった。即ち日本近代文学の史的考察の根本的視点を、近代自我確立の線に沿って設定し、更に具体的作品の考察を通して、その性格の規定にまで進み出ようとしていることは、日本近代文学叙述史において注目に価するものでなければならない。（しかしその本質を、個人主義として把握し、日本近代文学史を個人主義文学の発達史として把握していたことは、即ち、人間の可能性への信頼を、そのまま自然主義（個人主義）文学の運動と重ね合せる形で把握していたことは、著者の研究が、意図したあるべき姿（未来像）人間の可能性への信頼というその向日性にもかかわらず、ニヒリズムへの傾斜を余儀なくし、広く一般文芸界というよりも、日本近代文学の歩みがまさにそうであったように、所謂「文壇文学史」的方向を辿らざるを得なかったモメントにもなっていた。何故なら、自然主義とは実は時代的主体的弱さを反映した文学思潮であり、その「半産」は自然主義的必然であったのだから。）

「諸相の概観」の叙述は、そういう根本的把握（視点）のもとにその史的展望と特質の諸相、確立までの歴史としての思想的並びに手法的背景などについての考察を「第一章」に、以下その展開の諸相について、それぞれの特質と発展を概観し、更に主なる作家作品について具体的有機的に考察するという形態で進められている。そこに辿られている日本近代文学史、ここでいう個人主義文学の発達史の著者の見取図（縦に通観）はおおよそ次のように要約して大過ないのではないかと思う。

つまり『新体詩抄』や『小説神髄』などによる所謂「ひよわい」ながらの「新文学理論の誕生」から、浪漫主義によるそれの「主体

的消化」を経た後、自然主義と後の白樺派とによって一応の確立をみた日本近代文学は、その確立と同時にその道への「梗塞」を感じて（「戒心」）、屈折・変転・分化、即ちその梗塞に処するための新しい工夫に傾いた結果、新現実主義（「後期自然主義」）時代の円熟（日本的）に到達した。それがそうした形の円熟であった上に、プロレタリア文学（「無産派」）からの刺激などもあった関係で、新現実主義から新感覚派以後にかけての時代に、所謂「解体」と「崩壊」との危機に頻したのであった。

この要約に誤りがないとすれば、それは著者の次のような言葉と符号する。

芸術は――特に散文芸術は「人生派的意図と、芸術派的意図との夫々の極限の間に介在するものだ。」（広津和郎の「散文精神」との関係を想起させる。）したがって一つの散文芸術が、その両極限の一つの果（即ち人生派的熱情熾烈であった自然主義文学の誕生）から他の果（即ち芸術的洗練と雅醇の味わいの極に到達した新現実主義）まで閲し尽した時、その運動の周期はまず終ったものと見ていい。そこになお残された周期があるとすれば、それはただ「転落」の過程だけだ、と言っている。

日本近代文学についてのこのような把握、即ち人間主義の線に沿って展開してきた所謂個人主義文学が、結局は人間の「解体」や「分裂」や「崩壊」へと連ったという把握（根本的には先に触れた著者の自然主義の把握の仕方と関係する。）は、「解体」や「崩壊」の根本的原因の克服、即ち再把握という積極的方向を迫る代りに、その志向と方法は、まずそういう「崩壊」の過程を具体的に示している日本近代文学史の究明こそが急務であり、そこに見い出される人間の可能性発掘（「積極性」）こそが新しい生き方への示唆であり、そこから人間再建や意志的な生き方、それを導くべき正しい方向の提示（「組織化」）という一面消極的な方向へと導いた。この方向への情熱が著者の日本近代文学に対する考察の全体を支える大きな特色となっている。このことが独特な姿勢（挫折や屈折を余儀なくされているものへと深く立ち入り、そこになお崩折れない人間肯定の意欲に「積極性」を見い出すという姿勢）で、その具体的分析と批判へと鋭く立ち入らせることになったのである。そこには、作品の背後に迫る科学性の獲得、その方法（リアリズム）への信頼と同時に、当時、野呂栄太郎の「日本資本主義発達史」（昭和二年新潮社『社会問題講座』、昭和五年鉄塔書院、後岩波書店刊の同名の単行本収録）他を熟読していたという著者の、機械的決定論・宿命論へ流れまいとする潔癖な努力が秘められている。また、そういう傾向に対する厳しい批判の態度でもあったのである。

三

そうした著者によって、そこに指摘された具体的特質（横に通観）は、小説中心の時代・個人主義思潮の貫流・現実尊重・写実主義等の他、徹底主観的・無法則性・超現実社会性・苦悩・虚無観宿命観・素材的複雑さの反面内容的単調さ・トリヴァイアリズム・内観性・純粋性・抽象性・気分・神経・直感・批評不振等々、いずれも日本近代文学が余儀なくされた一種悲劇的象徴的な特質（性格）の数々であった。更にこれらの特質が、既に指摘してきたようにあくまで一本の糸（視点）に貫かれて、しかも具体的な作品を通して考察されているところにその特色がある。そこでは「頽廃的」「享楽的」あるいは所謂「痩馬」であるという理由だけでは決して非難さ

れていない。こうして日本近代文学史の高嶺を形づくる所謂「悲劇の作家」達が、外ならぬ「苦悶の象徴」として生き生きと捉えられることになったのである。

こうした著者の態度は、その時代区分において（基本的には従来と大差ないが）明治三五年の花袋の西欧自然主義文学理論の紹介から三九年の藤村の『破戒』出版までを自然主義文学の「醗酵期」と呼び「前期」に数え、以後末年までを「確立期」と呼んで「後期」と数えるとともに、新現実主義が外ならぬ自然主義の「後期」であるという認識から、その意味ではそれと区別するために「確立期」を「本期」と呼ぶなど、作品に即した柔軟な態度にまで語られている。（註2）

更にこのように個人主義文学を性格づけたものとして、著者は「キリスト教内観主義の強い影響」と、わが国における「資本主義的社会組織の急激な発達」とをその要因として指摘する。即ち、内面的唯心的世界への飛翔・虚無とか天の調和への徹到・ブルジョアジーの戒心（匿身的宙返り）に伴う大衆遊離・社会性欠如・文壇（日本的）の誕生・私小説心境小説の流行等すべてそこに帰因する、と。

しかし著者は、日本近代文学がそのような道を辿ったことについて「それは返す返すも残念なことであったと思ふが、然しさういふことになって行ったために――個人主義文学が社会に生きない知識階級の知的追求だけのものになって行って了ったために、それが時潮的真実に即するといふ以上、当然有たなければならなかった浅薄な実利主義などからの、何等の規定をも制約をも受けて来ない、極めて純粋なものになったものであることを思へば、それも一面には却て喜んでいいことであったかも知れないと思ふ。」とも言っている。これは日本近代文学の、あるいは唯一の救いの指摘であったとともに、そこには著者自身の匿身の姿勢も感じられる。が反面、新しい社会組織に対応して必然的に誕生してきたものが、それとしての当然の成熟を持ち得なかったという事実を辿ってみせたことにより、そこにはそれを自己批判的に克服できなかった主体性の弱さへの反省と同時に、必然的なものの成育を阻む力の、極めて強大であったことへの鋭い批判とそれを変革する積極的意欲とが如実に語られることにもなったのである。（この時期――大正末年から昭和初年頃――小説概念の正統性を争い、数々の文芸論争が盛んに行われたことは想起してよい。）

とにかく複雑多岐を極めた日本近代文学を、見てきたように個人主義文学として把握し、それを特性づけたものとしてのこの二大要因の指摘は至言であり、その適用のみごとさとあいまって、それは日本近代文学の本質（自我確立の歴史）とその日本的性格（半産性）の根本的面貌を明らかにすることになったのである。更に次の考察はみごとだと思う。「（前略）それ（自然主義文学）は確かに人生に触れた文学として確立されたのだ。が、その触れ方がまだ被動的、従って諦視といふ境から多く出なかったことは争はれない。個人の権威が確信され、従って人間絶対の気持が強く動いて来るにつれて、軈てさうした個人主義文学の静動的被動的な態度が物足りなく感じられはじめたところに、軈て積極的能動的に、人生を動かして行こう、造り直して行こうとする意図が生れて、即ち無産派文学の継起といふ現象が起った訳だと云へるのだと思ふ。個人主義文学が人生に即してそれを諦観しなかったら、或は其処に新しき道を樹

立しようとする無産派の主張も生れなかったかも知れない。（後略）」（二〇六頁）

ここで著者はプロレタリア文学を自然主義文学の発展とみながら「諸相の概観」では勿論（『現代文学諸相』といふ言葉は、当然自然主義以後の個人主義文学一般と、無産派文学とのすべてを含んでゐる筈だ。自分も無論その意志で、（中略）幾らか無産派文学の方面の材料なども、用意したのであったけれども、（後略）」――はじめに――）、その後においても遂にプロレタリア文学についての本格的考察は試みられなかった。このこともまた、既に触れてきたように、著者の日本近代文学史（自然主義文学）把握と無縁のものではなく、その根本的性格とかかわるものである。（註3）

このような「諸相の概観」の成立は、勿論これまでの多くの作家評論家文学史家達による近代文学史叙述にその多くを負っている。時代区分や文学史的構図は勿論のこと、日本近代文学を個人主義文学として把握するに至るまでの基礎は、既に、例えば自然主義文学史観によった相馬御風の文学史（前掲）などによって用意されていたとみることができる。また著者の精緻な考察は、それまでの研究、特に大正末年から『早稲田文学』が「明治文学研究号」（大正一四年三月・六月・七月および一五年一月・四月、昭和二年四月・六月の計七回にわたって刊行）を出すにおよんで積極的になってきた資料研究、それに基づく作家作品研究などの業績なくしては考えられないものである。「諸相の概観」の叙述に直接顔を出しているものをみても、土居光知・岩城準太郎・高須梅溪・相馬御風・宮島新三郎・生田長江はじめ、非常な数に昇っており、著者が「日本文学史概説・明治時代」（前掲）の「註」に数えあげている文学史の文献数を見るまでもなく、そのことは明瞭である。（著者は、後に『現代作家論叢』に収められた数々の作家論を既に発表していた。）

叙述が散漫になり、肝心の著者の具体的叙述に触れないうちに、予定された紙数がなくなってしまったが、それは著者の後の業績の研究とあわせて次の機会にゆずりたいと思う。

――法政二高教諭・本学大学院修士課程在学――

註1「諸相の概観」は雑誌に発表されて以来今日まで、未だ単行本に収録される機会がなく、読まれる機会が少ない。なお、著者の業績については、本誌二号「片岡良一教授追悼号」に、令息懋氏による詳細な年譜があり、著書、論文のほとんどすべてがかかげられているので参照されたい。

註2　この著者の時代区分は「日本文学史概説・明治時代」（前掲）の「黎明期」「自覚期」「小康期」「蕩揺期」「確立期」「鍛錬期」と、明治時代を六期に分けるやり方などを経て、おおよそ次のように定着した。

成立期（明治初年から二四、五年頃まで）明治前期
成長期（二五、六年から明治末葉まで）明治後期
成熟期（明治末葉から大正末葉まで）大正期
解体期（大正末葉から昭和二〇年まで）昭和期

（昭和二四年四月特輯号『国語と国文学』掲載の「近代日本文学史」）

時代区分やその呼び方にも、著者の日本近代文学史把握の根本態度がうかがわれる。

註3　プロレタリア文学についての著者の発言は、本格的ではないけれどいろんなところで数多く鋭い批判が散見できる。が、その考察はここでは省略する。（三六・四・一四）